

『生活保護 VS ワーキングプア
～若者に広がる貧困』
大山 典宏 著
(PHP新書 ¥720)

大変衝撃的な内容で、本当にいろいろなことを考えさせられる1冊です。

著者の大山さんは、市町村における生活保護行政に長く携わるとともに、「生活保護 110 番」というサイトを運営されている実践を基に、若者に広がる貧困とその連鎖、そしてセーフティネットから漏れ続けている「最大の被害者」＝「子ども」にスポットを当てています。

今や、社会全体の課題として若者の貧困を取り上げる（取り上げざるを得ない）時代となったことは明白です。課題の切り口を生活保護制度に求めたためか、それらの根底にある家庭機能の変質や教育問題などへの言及が物足りなく感じられたことは事実ですが、それを差し引いてもなお、本書がそのことを極めて分かりやすく、かつ課題を共有しやすい形で提示した意義は大きいと思います。

貧困は連鎖します。確かに、日本において餓死を強いられるような「絶対貧困」は極めて稀ですが、本人の努力にも関わらず年収が国民平均の半分以上にとどまる「相対貧困」の比率は着実に増加し、そして固定化しています。その意味で、生活保護制度を単なる「セーフティネット」ではなく、広く「自立支援」や「社会参加」のためのツールとして活用すべきではないかという本書の主張には、耳を傾けるべきものがあります。

何より、現役公務員でありながら、この意義深い本を（しかも持ち込み企画として！）上梓した大山さんの勇気と行動力に対し、同じ公務員として畏敬の念を抱かざるを得ません。いわゆる業界関係者だけでなく、むしろ生活保護とは無縁の生活をされている方々にこそ読んでいただきたい1冊です。（又村あおい）

あとがき

投資の専門家は、「これはバブルだ！」と気づくものであり、決してそのような証券には手を出さない。これは素人考えであるようだ。投資の専門家こそが、バブルであることを知りながら、危ない証券に積極的に手を出すらしい▼複雑な社会になると、専門領域あるいは専門家がたくさん生まれる。専門用語や技術もたくさん登場する。なぜ投資に根拠の原理が？ 市場は実体経済と違うの？ 専門領域ならではの畏がそこには存在するようだ▼障害のある人の生活やそれを支える仕組みも、明らかにひとつの専門領域になっている。一般の人にはわかりづらい用語や技術がたくさんあるに違い

『あの戦争から遠く離れて
～私につながる歴史をたどる旅』
城戸 久枝 著
(情報センター出版局 ¥1,600)

著者の父親は中国残留孤児であった。

敗戦直後の旧満州、過酷な逃避行ではぐれた4歳の父がどのように中国人に拾われ、育てられ、養母との深いきずなのもとで成長しながらも、大学に進学するには是非とも実の両親を探し帰国しなければならないと決意し、懸命の努力の結果、両親の所在を探しあて、自力で帰国の道を切り開き、国交正常化前の1970年、28歳で日本への帰国を果たし、就職や結婚を実現していく経過が克明に記録されている。帰国するまで暮らしていた牡丹江省寧安県頭道河子村の人々の暮らしや、学校生活が、国共内戦、土地改革、農業の集団化、大躍進政策、鉄鋼増産政策、交心運動、大飢饉、文化大革命など、激動する情勢からどのような影響を受けていったかについても詳細に書かれている。

著者は10年の歳月をかけて父から話を聴取し、父のゆかりの土地、牡丹江に父を知る人々を訪ねて父の養母の親戚や父の親友、近所だった人々との温かな交流を重ねる中で本書を完成させた。

父の生い立ちに関心があった著者が20歳のとき、夏休みを大連でホームステイしたことを機に中国の現代史を知り始め、驚愕する。そして、父が前半生を生きてきたこの国をもっと知りたいと留学を決意するようになる。父は当初、留学に反対していたが、意思が固いのを知ると留学を喜んでくれるようになり、自分の帰国に関する膨大な資料（新聞記事や手紙、手続き書類等）を初めて見せてくれる。これらに目を通すなかで、著者は自分が中国残留孤児二世であることを初めて強く意識する。父の前半生をめぐる研究の旅が始まった。（半田世志子）

ない。社会一般の悪しき慣習や配慮のなさゆえに、生きにくに感じている人たちが目の前にいる。少数派意見であっても、そのような人たちの権利を強く主張しなくてはならない。新しい法律や制度による不利益は、なおさらだ▼しかし、そこに専門領域の畏はないのだろうか。最低賃金の大幅アップは、多くの働く障害者の生活を守ることになるのだろうか？ 応益負担の原理は、障害のある人の生活を逼迫していくのか？ 民にできる直接サービスに限界はないのか？ 不況の時代に突入する今こそ、しっかりと検証すべきではないだろうか。（志賀利一）

福祉の主体者——それは障害をもつあなたです！

かざぐるま



188

2008.12
目次

風：師 走（香坂勇）	2
ケアが街にやってきた	
医療的ケア実務者研修 in かながわ ご紹介（江川文誠）	3
鎌倉市発達支援システムネットワークについて	
（鎌倉市障害福祉課療育相談担当）	4
クローバースタッフと共に ～京急ウィズ創立5周年（加藤久博）	6
特別支援教育による学校づくりⅠ 多様性とチーム支援（安藤壽子）	8
わが子の巣立ちを見守って	48
一歩、一歩、ゆっくりと（豊田雅子）	10
本：『生活保護 VS ワーキングプア』『あの戦争から遠く離れて』	12

発行：神奈川県保健福祉部
編集：小児療育相談センター
広報委員会

身近なニュース、活動報告、その他ご意見ご感想、素朴な疑問などをお寄せください。
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-9-1
小児療育相談センター 広報委員会 TEL：045-321-1721 FAX：045-321-3037
Eメール：shoniryoiku@shinseikai-y.jp

風

師 走

香坂 勇

(NPO 法人総合福祉サポートセンターはだの理事長)

12月のことを「師走」と言いますが、その語源・由来について調べてみると、主な語源説として、師匠の憎がお経をあげるため東西を忙しく駆け巡る月という意味で「師駆す(しはす)」のようです。

一方、「年が果てる」意味の「年果つ(としはつ)」が変化したとする説、「四季の果てる」意味の「四極」(しはつ)、「1年の最後になし終える」意味の「為果つ」(しはつ)などの説もあるようです。

2008年も師走を迎え、この1年を振り返ってみると、ダイエット食品宣伝のねつ造、食品偽装問題、世界的金融不安、原油価格の乱高下等、世間を騒がせる様々なことがありました。福祉の世界でも障害者自立支援法抜本対策の検討、少子高齢化対策、後期高齢者関連等重要課題が山積しています。このようなことから、現状の景気低迷、政治不安から将来への生活不安などの解消策等、各界での論議が云々され、今までに例を見ない年であったと言えるでしょう。

師走を迎え節目の月にもかかわらず、多くの課題を積み残す状況下において、自分自身どのような視点のもと行動すべきかが、求められのではないかと思います。

様々な課題や問題点は気になることは当然です。しかし、それに振り回され一喜一憂するのではなく、各自の立場や役割を認識した中で、「着実に」「前向きに」「プラス思考で」取り組むことが、今の世の中に必要とされるのではないのでしょうか。暮らしやすい世の中にするためにも、今こそ「希望の風」を起こす時です!!

表紙のことは、赤レンガ倉庫広場(横浜市中区)

横浜の空の下、スケートを楽しむ。

〈撮影〉岡本 吉弘



養護学校の運動会 リレーの選手です

入学当初に小学校での最終目標として「自立登校」がありました。自宅からは難しかったのですが、校門からは一人で行き、靴を履き替えて教室まで行くことができたので、目標達成かな?と思っています。それと、毎日元気に休まず登校できたこともかな?

◆中学生

小学校は地域の学校でわが子のことを知ってもらいましたが、中・高等部の6年間をゆっくりと社会に出る準備期間と考えて、中学校は養護学校を希望しました。入学してからは、少々戸惑ってはいましたが、様子を見ながら学校に慣れさせてくれました。新しいことや行事の時は必ず事前学習をし、よく理解させた後に本番を迎えるようになっていたので、本人も落ち着いて行動できる様子で安心でした。

運動会も感動的で、子どもたちが自分の持っている力を一生懸命発揮しているのが伝わってきます。わが子もリレーの選手に選ばれて、しっかりとバトンを持ち、一人で止まることなく走り、次の人へバトンリレーができました。保育園の時のことを思い出し、ゆっくりではあるけれど、確実に成長していることを実感したのでした。

社会に出るための勉強として、毎週月曜は作業の日です。織物班に入って毎日 20~30 cm、集中して織り続けているそうです。作業手順をすぐに覚え、織り目もきれいに揃っています。できあがった作品を見ると、糸の色を自分で選び、センスのよさに感心。わが子の新しい才能を発見しました。将来どんな仕事につけるかはわかりませんが、在学中にいろいろな可能性に挑戦してもらいたいと思っています。



「自然・馬・人の会」で毎月1回乗馬を楽しんでいます
ホームページ <http://shizen-uma-nitonokai.jp>

◆余暇活動

学校から帰った後の余暇をどう過ごすか、親にとっては悩みました。小学校の低学年の時は一緒に散歩に行ったり、公園に行ったりしましたが、高学年になった時に外遊び中心に活動してくれる児童デイサービス「ありんこクラブ」を利用し始めました。週2回、自然の中での遊びを楽しみ、親以外のスタッフの指示もよく受け入れることもできたし、他校の利用者とも仲よくできてよかったです。

翌年、学童保育もでき、そちらに移って毎日利用し、仕事を持つ私は仕事の量も増やせたり、姉妹に対しても少し時間を使えるようになったりして、気持ちにゆとりができました。

しかし学童保育は小学校まで。中学校に行ってもこの生活スタイルは変えたくない、どうしたらいいのかと思っていた時に、平塚市が中・高校生を対象としたタイムケアサービス事業の準備委員会を発足させました。メンバーに誘われ、数年後にはわが子も利用することになると思い、参加させていただきました。障害福祉課のM氏を中心に話が進められ、利用者側の意見がいろいろ取り入れられました。当初の予算が大幅に削減されたようですが、利用者は今までにないサービスができて大変よかったようです。現在サービスが実施されて3年目、利用者も増えて毎日子どもたちの安心して利用できる居場所があるのがうれしいです。笑い声が響き、笑顔がたくさん、スタッフのみなさんに感謝します。

そして、家族みんなには、いろいろ苦勞ばかりさせてしまっているけど、いつも感謝しています。ありがとうございます。これからもよろしくね。

わが子の巣立ちを見守って 48

一步、一步、ゆっくいと

豊田 雅子（平塚市）

◆どうして？

わが家の長男、現在、湘南養護学校中学部 1 年生です。姉と妹がいて、女の子に挟まれているせいか、とても穏やかな性格の男の子です。

見た目は好青年ですが、自閉症と診断されています。この診断を受けたのは 2 歳の時でした。それまで自閉症という言葉すら聞いたことがなく、何がどうなってるの？ 治る病気なのかしら？ と疑問ばかり。どうしてうちの子なの？ と納得がいきませんでした。医学書を見ると症状がすべて当てはまり、改めてこれからどうしたらいいのか、不安になり、この子を育てていく自信がなくなっていく日々でした。

しかし、アグネス園との出会いによって、先生方からも「自閉症だから何もできないということはないし、他の子どもより少し手助けが必要なだけよ。一緒にやりましょう」と励まされ、その時からしっかりとこの現実を受け入れようと決意したのでした。

◆幼児期

アグネス園の入園が決ったけれど、まだ 2 歳。オムツも取れていないわが子をひとりスクールバスに乗せて大丈夫かと心配しましたが、1 週間も過ぎると笑顔でバスに乗り込むようになっていました。

園では、個々のレベルに合わせて療育計画を立て、集団生活に慣れることなど、小さな目標を立ててそれを達成させながら進めていきました。トイレトレーニングもちょっと大きな目標でしたが、園と家と同じ方法で進めることで、卒園する時には何とか達成できて本当によかったです。

先生方の励ましから少しずつできることが増え、次は地域の子もたちとの交流を、ということになりました。地域の保育園の一時預かりを利用しながら、少しずつ慣らしていきました。園児たちの行動はとてもいい刺激となり、自分から興味を持ったことは少しずつ行動に移せるようになってきました。

その頃、就学前の 1 年間をどうするか悩んでいて、特別支援級の入学を希望する小学校で少しでもわが子を知っている友達がほしかったこともあり、思い切って保育園に預けることにしました。

園での生活で最初に興味を持ったのがブランコでした。保育者に長い時間押してもらって楽しんでることが多かったみたいです。各行事も可能な限り参加できました。その中でも感動したのが運動会でした。初めてなのでわが子が無理なく参加できる種目だけで十分と思っていたのですが、年長紅白リレーにも参加するとのこと。子どもたちがどうしたら勝てるか考えた結果、わが子と手をつないで一緒に走ってくれることになりました。ドキドキしながら見ていると、作戦が見事に当たり、勝つことができました。ゴールした瞬間は会場のすべての人が感動していたのを今でも覚えています。みんなに感謝の思いでいっぱいです。

◆小学生

小学校は地域の特別支援学級に入学。今までの環境とはまったく違ったので最初はとても不安でしたが、担任は養護学校での経験があり、先生にいろいろ教わりながら子どもと一緒に学んでいこうと思いました。

わが子が一番初めに興味を示したのがパソコンでした。使い方を教わるとすぐに覚えて、簡単なゲームから文字入力までできるようになり、今では誰が教えたわけでもないのに TV CM と入力し、お気に入りのコマーシャルを見て喜んでいます。

学習面でも、ひらがなやカタカナの文字の練習、足し算の計算練習を嫌がらずに取り組むことができました。また、言葉の出ないわが子が自分の意思を伝える手段としてコミュニケーションブックを製作してもらい、お蔭で先生に自分のやりたいことがスムーズに伝えられるようになったのです。

ケアが街にやってきた

医療的ケア実務者研修 in かながわ ご紹介

かながわ医療的ケア実務者研修実行委員会 委員長 江川 文誠（ソレイユ川崎施設長）

かつて病院を退院するには自力での食事摂取や呼吸が行えることが前提でしたが、昨今の医療・看護技術の進歩と、長期入院を認めなくなった医療情勢から障害のあるなしにかかわらず多くの市民が病院から地域生活に早期に移るようになってきました。

吸引や経管栄養といったケアのみならず、酸素療法や人工呼吸器療法といったケアも含めたこれらのケアは「医療的ケア」と呼ばれ、いままでボランティアや福祉職員が関与できるかどうか不明確でした。

平成 16 年から 17 年にかけて厚生労働省から 3 つの通知が出され、これらのケアの一部を非医療職が担うための条件が出されました。基本的には医療職による責任体制の確保、救急時の対応、非医療職への教育指導などが含まれるのですが、あわただしい外来の場面で教育指導は短時間で終わる傾向があります。責任の一端を担おうとするボランティアや福祉職からは、「もっと基礎的なことも含めてちゃんと学びたい」という希望が多く寄せられていました。

そこで平成 19 年に、神奈川県肢体不自由児協会・神奈川県重症児を守る会・横浜重心グループ連絡会（ばざネット）が中心となって実行委員会をつくり、県内の多くの社会福祉法人・NPO 法人などの協力により平成 19 年 10 月に「第 1 回 医療的ケア実務者研修 in かながわ」を開催しました。その後第 2 回を平成 20 年 3 月に、第 3 回を平成 20 年 9 月に開催し、いまでは研修修了生も約 400 人に達しました。

受講生は県内のヘルパーステーション、通所施設、療育センター、重症心身障害児施設、身体障害者療護施設、特別支援学校などの各事業所の職員やボランティアの方々です。また同様の課題を抱える高齢者のために介護保険関係の事業所の方も参加しています。

講義 1 日、演習 1 日の合計 2 日間行われる研修会ですが、第 2 回目以降は医療的ケアの必要な人とともに

暮らしているご家族も病院ではきちっと教わらなかった基礎的なことを 1 日目だけ参加して聞いていただけるようにしました。

この研修会開催にあたっては、国の自立支援法に関する特別予算を受け、神奈川県がかながわ福祉サービス振興会に委託した事業の予算で必要な備品の購入ができました。また神奈川新聞厚生文化事業団と神奈川福祉事業協会からの援助もあり、2 日間研修で費用が約 1 万円（教科書を含む）で実施できました。これら備品が用意できたことと、来年度は県からも応援をいただければより安く実施できるようになるべく鋭意交渉中ですのでご期待ください。

来年度の実施は平成 21 年 10 月ごろを予定しています。ご案内は神奈川県肢体不自由児協会の HP で見ることができますので、ご関心のあるかたは、おそらく 7 月以降に掲載ができると思いますのでアクセスしてみてください。<http://www.kenshikyou.jp/>

最後に、この場をかりて 2 つコマーシャルをさせていただきます。

①DVD「みんなの医療的ケア」（かながわ福祉サービス振興会発行）を神奈川県内で研修などに利用されることを前提におわけする予定です。これは実務者研修の内容が下敷きになっています、ご活用ください。

<http://www.kanafuku.jp/>

②本「ケアが街にやってきた」（クリエイツかもがわ発行）定価 2940 円をぜひお買い求めください。この本は実務者研修のメンバーを含めて全国の医療的ケアに携わる人が執筆した Q & A 方式の医療的ケアガイドブックです。福祉、医療、地域でそれぞれの立場でどのような工夫をして取り組んでいるのかがわかりやすく書かれていて、励まされる本です。

<http://homepage3.nifty.com/kazu-page/book/book-careintown.htm>

鎌倉市発達支援システムネットワークについて

鎌倉市障害者福祉課療育相談担当

■何をするためのシステム？

発達支援システムネットワーク（以下「発達支援ネット」）は、鎌倉市内にお住まいの成長や発達に支援が必要なお子さんとその家族が、ライフステージに応じた一貫した支援を受けられるようにするためのシステムとして、平成 18 年 1 月にスタートしました。

■「横のつながり」と「縦のつながり」の強化を目指して

人は、成長とともに生活する場所や関わる人が変化していきます。このような生活環境の変化に順応していくことはとても大変なことです。とりわけ、

特別な支援を必要としている

人たちにとって、このライフステージごとに起こる環境の変化は、生活していく上でとても大きなハードルとなります。

このハードルをスムーズに乗り越えていくために欠かせないことは、途切れのない一貫した支援です。このような支援は、対象となる人やその人を取り巻く環境について、支援者同士が共通理解し、同じ支援目標を持つことによって実現します。

つまり、各ライフステージ内でのネットワーク（横のつながり）とライフステージを繋ぐネットワーク（縦のつながり）がともに必要なのです。

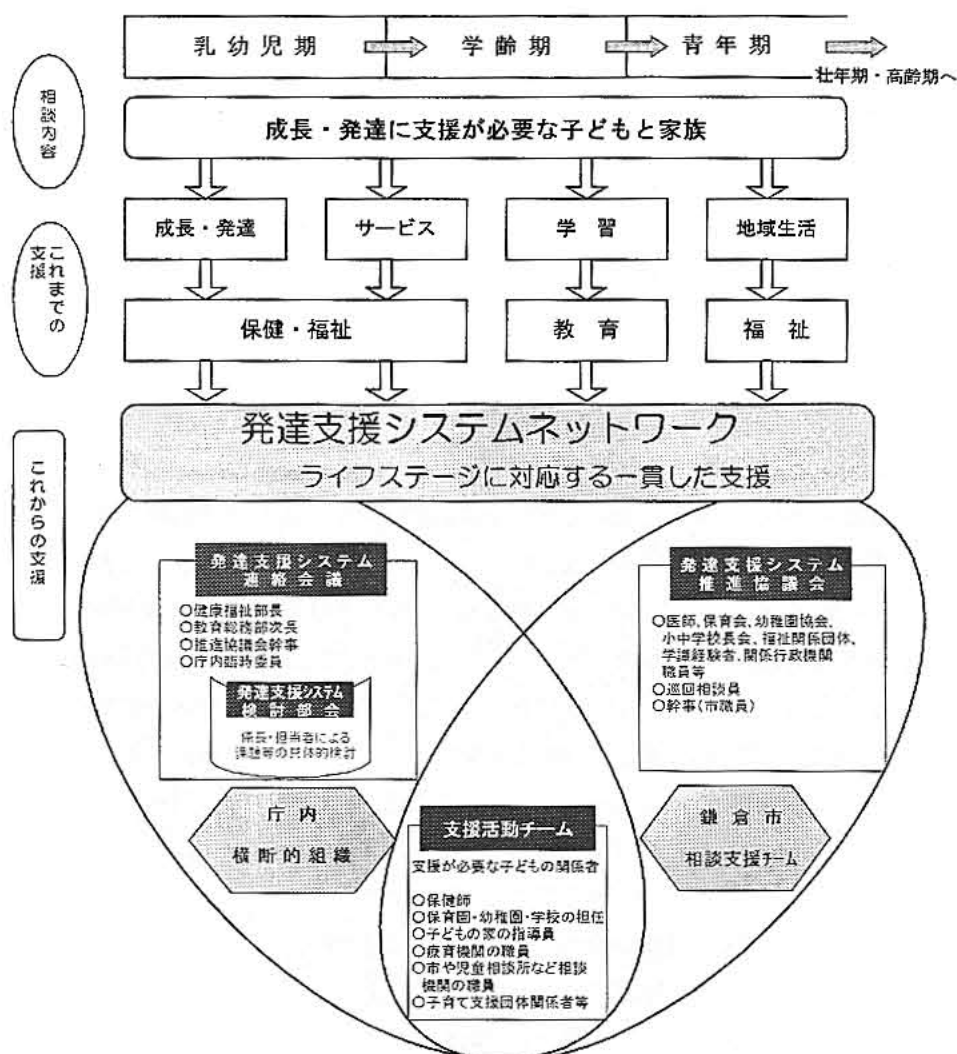
発達支援ネットは、この縦と横のつながりそれぞれを強化し、ライフステージに応じ

た、途切れのない支援を目指すためのものです。

もちろん、発達支援ネットができる以前も、関係機関が連携しながら支援を行っているケースはありました。しかし、機関同士の連携の仕方や中心となる機関が明確でなかったため、一貫した支援を行うことに困難がありました。

そのような事情を踏まえ、発達支援ネットでは、支援の進行管理をする機関を明確に定めました。

このシステムができたことで、ライフステージに応じた一貫した支援を受けられる体制整備が一步前進したといえます。



鎌倉市発達支援システムネットワーク体制図

という特別支援教育の理念を学校教育全体に位置づけ、定着させる上で望ましい方向性と言えよう。

一方、特別支援教育を取り巻く意識改革や取組状況には、地域差、学校差があることも否めない。特別支援教育の実践を深め、広げ、確かな成果をあげることによって、点の取組を線につなげ、面に広げ、特別支援教育を学校教育にしっかりと位置づけていくことが課題となっている。そして、そのキーワードは、多様性とチーム支援であると私は考える。

多様性とチーム支援

多様性とは、学校内に様々な異質性が抱合されていることである。多様性のある学級とは、たとえば、「はらっぱ」のようなものである。花壇の花々のように、洗練された色、形ではなく、大きさも不揃いではあるが、一つ一つがかけがえの無い個性を備え、それぞれに主張しながら、全体が絶妙なバランスの上に成り立っている。正に「♪小さい花や大きな花♪一つとして同じものはないから♪もともと特別な Only One」（「世界に一つだけの花」）である。教職について以来、学級づくり「はらっぱ」のイメージを重ね、我が学級便りの題名は「はらっぱ」と決めている。

特別支援教育を必要とする子どもは、はらっぱに咲く花のように個性豊かであり、発達の要因、心理的要因、環境的要因等、多様な背景から生じたつまづきを抱えている。したがって、このような多様な子どもを支援する側にも、多様な専門性に基づくチームワークが要求される。

学校内には学級担任以外に、専科教諭、養護教諭、アシスタントティーチャー等の教員、事務職員や技術職員（用務、給食）等の職員がいる。限られた人数で多くの教育的ニーズに応えるうえで、全ての教職員は重要なスタッフである。このような多様性を生かし、チームワークによる学校運営を学校長がリードし、特別支援教育コーディネーターが組織的取組を推進することによって、特別支援教育の視点による学校づくりが可能となる。

また、学校外には、カウンセラー、ケースワ

カー等の福祉領域の専門家、児童精神科医、PT（理学療法士）、OT（作業療法士）、ST（言語聴覚士）等の医療関連の専門家がいる。最近では学校外の専門家との連携が進められ、必要なときはいつでも支援を要請できる素地ができつつある。このような人材を有効に活用し多様性とチーム支援が確保できるか否かが、学校づくりの鍵を握ると思う。

ある事例を挙げてみよう。入学当時、お母さんのそばを離れられず不安そうに周囲を眺めていたAちゃん。言語理解に弱さがあり、一斉の指示では行動することが難しかった。集団学習について行けず、個別的な指導を必要とした。友達とのコミュニケーションが取りにくく、休み時間の過ごし方にはさらに難しく、一人ぼっんとしていることが多かった。こうした課題をもつAちゃんにお母さんはずっと寄り添い、様々な支援を受けながら、困難を一つ一つ克服し乗り越えていった。学校はAちゃんとお母さんをチームで支え、その時々状況に適切に対応する支援法を模索した。

誰もが少しずつ優しくなれば

フェスティバルの朝、Aちゃんに会った。にこにこ嬉しそうに、積極的に話しかけてくれた。その表情にここ数年の大きな成長を感じた。

子どもも大人も人間であり、波がある。調子がよいときも悪いときもあり、また、人間どうしの相性もある。コミュニケーションが行き詰ったら、どこかに糸口を開いてくれる誰かを探り当てることである。

Aちゃんにとってのキーパーソンはもちろん何人かいたはずである。校内だけでなく地域にも、Aちゃんとかかわり、お母さんを支える多様な人々の輪があったからこそ、Aちゃんは自分のよさを生かし伸びることができたのだろう。

子どもを取り巻く誰もが少しずつ優しくなれば、と思うことがある。特別支援教育の推進には、求められている支援を的確に把握し適時に実践できる柔軟性や実践力が求められる。それは、人間的な強さに裏付けられた優しさではないだろうか。（次号につづく）

特別支援教育による学校づくり I

多様性とチーム支援

横浜市教育委員会養護教育総合センター
特別支援教育相談課課長 安藤 壽子

夢と希望が集まる学校

青空の爽やかな秋は、学校行事の季節でもある。駅から学校へ続く銀杏並木をくぐり抜けると、朝日に輝く黄金色が眩しい。三角の葉がきらきらと喋りかけてくる。久しぶりに子どもたちに会える。

きょうは学校のフェスティバル。たくさんのお客様を迎え、日々の学習で積み重ねた力を発揮する晴れの舞台だ。学校中がざわめき、興奮し、活気づいている。子どもたちの偉大なパワーに満ち溢れている。

全ての教室を巡り、できるだけ多くの子どもたちと話をしたい。「げんき?」「がんばってね!」「大きくなったね!」一言しか言えなくても、その一言に心を込めて…。

子どもはみな、自分の存在を誰かに認めて欲しいと願っている。子どもはみな、自分の意思を誰かに表現したいと思っている。学校は、そんな子どもたちの、そして、先生たちの、夢や希望が集まる場所である。

ところが、社会の変容が著しく、様々な課題が学校へ押し寄せて来るにつれ、学校だけでは抱えきれない矛盾が生じている。それは、学校への期待の大きさとも言えるかも知れない。学校は、今、社会に開かれた存在として、多様なニーズに積極的に応えることが求められている。

このような状況を救う鍵が特別支援教育にある。特別支援教育の視点を学校づくりに生かすことで、学校は生まれ変わる可能性をもつ。

特別支援教育の視点

平成 19 年、改正学校教育法の施行によって、特別支援教育は法的に位置づけられ、全ての学校において取り組まれるものとなった。「一人一人

の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う」(特別支援教育の推進について、平成 19 年、文部科学省)という特別支援教育の理念は、障害がある児童生徒に限定されず、支援を必要とする全ての子どもを対象とするところに意義がある。さらに、「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている」と続き、特別支援教育が教育の普遍性を有していることを示唆している。

このような特別支援教育の理念は、学校教育の中で真摯に受けとめられ、徐々に浸透し始めている。従来の特殊教育が、障害種別と程度によって通常の教育と明確に区別されてきたのに対し、今日の特別支援教育は、通常の教育の場に抱合されることをめざしている。その一例として、「特別支援教育を基盤とする学校づくり」というテーマによる取組も見られるようになった。

特別支援教育を学校づくりの基盤に

「特別支援教育を学校づくりの基盤に」というテーマが掲げられる背景には、不登校、いじめ、暴力等、学校不応答や非社会的・反社会的行動が社会問題化している現状がある。こうした問題は、従来、児童生徒指導や人権教育の領域で捉えられてきた。しかし、最近では、こうした行動の要因として発達障害（二次障害）が取りあげられるようになり、児童生徒指導や人権教育と特別支援教育との連携が不可欠との認識が高まりつつある。

このような認識の高まりは、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行う

■発達支援システムネットワークのしくみ

発達支援ネットは、ライフステージのどの時期からでも、どの相談機関からでも支援の進行管理を担う鎌倉市障害者福祉課と教育指導課を通じて立ち上げることができます。

立ち上げたネットの中で、実際に支援を行う組織は「支援活動チーム」です。そして、「支援活動チーム」が行う支援を、「推進協議会」、「連絡会議」、「検討部会」と呼ばれる組織がサポートします。

支援活動チーム: 支援を直接行っている関係者で構成する組織です。これらの関係者は保護者の同意を得て集まり、支援の対象となる方の情報を共有したうえで、支援内容を検討します。個別の支援計画などの作成や活用について助言することもあります。

推進協議会: 市役所以外の関係機関等の職員で構成する組織です。支援活動チームの取り組みに対する助言等を行うほか、支援にまつわる医療、保健、福祉、教育、労働分野における課題に関する情報交換を行い、相互の連携強化を図っています。

連絡会議・検討部会: 市役所内の関係課職員で構成する組織です。支援活動チームの取り組みに対する助言等のほか、支援を必要としているお子さんの早期発見や効果的な支援方法に関する調査研究、個人情報取り扱いや IT を使った情報管理システム等の課題検討をします。

■発達支援システムネットワークを使った支援

各機関が個別に対応することで、上手く支援できているケースは、改めて発達支援ネットを使う必要はありません。このシステムを使うのは、いくつもの機関が関わっているケースで、各機関が共通認識をもって支援することが望ましく、なおかつ保護者がこのシステムを使った支援を希望している場合です。

現在、このシステムを使って支援しているケースは 13 ケースあります。どのケースも複数の機関からの支援を必要としており、関係機関が対象となる人やその人を取り巻く環境について共通理解を図りな

がら支援しています。

支援の開始時期: 進学、就労のようなライフステージの移行期や家庭の事情等のため、本人介護を行う家族のサポート体制を強化しなければならなくなった時をきっかけに、このシステムを使った支援を開始するケースが多いです。

支援活動チームのメンバー(機関): 支援の進行管理を担う鎌倉市障害者福祉課と教育指導課をはじめ、市の関係各課、対象となるお子さんが所属している学校や園、医療ケアを行っている病院、障害福祉サービス事業所などがメンバーとして支援に当たっています。すでに相談支援を行ってきた児童相談所等がメンバーに加わることもあります。

平均すると 1 ケースあたり 4～5 の関係機関が支援チームのメンバーとして支援を行っています。

■「早期からの一貫した支援」の実現に向けて

一貫した支援を行うためには、ライフステージの早い段階で関係者が支援の必要性に気づき、その人にとっての効果的な支援方法を理解、実践しなければなりません。

発達障害等の特別な支援を必要としているお子さんは、従来の乳幼児健診ではわかりづらく、支援の開始が遅れがちといわれています。そのため、自治体によっては、幼稚園や保育園の年中児を対象とした健診等の事業を開始しています。

発達支援ネットの関連会議でも、早期支援の実現について検討を重ねてきました。従来、鎌倉市では、健診後フォローのためのグループ指導や幼稚園、保育園への巡回療育相談を実施し、効果を上げていますが、これだけでは十分とはいえない現状が明らかになりました。そこで、今年度から「5 歳児すこやか相談」を開始し、早期支援実現に向けた体制強化を図りました。今後さらなる検討が必要ですが、この事業が、ライフステージの早い段階で支援の必要なお子さんに気付くための一助となり、より効果的に発達支援ネットによる支援を実施することができればと考えています。

クローバースタッフと共に 京急ウィズ創立 5 周年

(株) 京急ウィズ事業部職場支援担当 加藤 久博

創立5周年

株式会社京急ウィズは、平成 15 年 9 月に京浜急行電鉄株式会社の特例子会社として設立されました。

このたび、おかげさまで創立 5 周年をむかえることができました。日頃から京急線沿線地域の皆様や、就労支援機関はじめ多くの方々に支えられここまできたと思っております。まずは御礼申し上げます。

今回は筆者の職務を通じて行ってきた、これまでの当社の障がい者雇用の取組みについてご紹介したいと思います。

「クローバースタッフ」38 名

当社では障がい者手帳を所有している社員を「クローバースタッフ」とよんでいます。現在 8 ヶ所の職場で合計 38 名が業務に励んでおります（平成 20 年 11 月 16 日現在）。

特例子会社は設立の際、一定の要件を満たし、障がい者の雇用に配慮されているとハローワークから認定を受けた場合認められます。当社では駅清掃業務からはじまり、クリーニング業務、ベーカリー業務など障がいの方が働く場をつくり、運営してきました。

業務内容と配属勤務地別内訳は以下のとおりです。
駅清掃 18 名（うち川崎班 12 名・横須賀班 6 名）、

ホテルリサイクル業務 5 名（東京地区）、クリーニング業務 5 名（逗子地区）、ベーカリー業務 8 名（横須賀地区）、施設管理業務 2 名（横浜地区 1 名、三浦地区 1 名）、となっています。

定着の取組み

当社では社員が「長く安定して当社で働ける」ことが大事だと考えています。それが一人一人の「自立」につながるからです。その柱となるのが、「会社」「就労支援機関」「ご家族」三位一体で本人の就労を支える考え方です。

昨年（平成 19 年）9 月、筆者は「職場支援担当」という新たな部署へ異動になりました。三位一体を実践すべく日々業務を行っています。具体的には、クローバースタッフ定着と新規採用に関わる業務と、見学実習受入等を担当しています。

社内では現場マネージャーが日々行う指導や労務管理を後方支援します。社外の方とは筆者の部署でメイン窓口となり調整を行います。

トラブルが起きた時は、まずは正確な情報収集。そしてすぐに就労支援機関へ連絡し、必要に応じて家族にもお知らせし、話し合いの場を持ちます。また現場で取り組んでいるクローバースタッフへの指導方針（例えば有頂天にならないよう引き締めて接している最中である、一歩先のリーダー的存在になれるよう修行中である、など）を尊重し、現場のニ

ーズを会社からアシストできるようにします。

清掃担当統括マネージャーは当社クローバースタッフの半数以上を束ね、4 ヶ所の職場を担当しています。このマネージャーと筆者は毎週のように 1 時間 2 時間と個々の問題や職場環境の改善をテーマに話し合いをしています。清掃、クリーニング、ベーカリー…、現場マネージャーのクローバースタッフへの熱い思いにはいつも頭が下がります。

ひとりのクローバースタッフが入社してから、就労を続けていくのには様々なことが起こります。そして決して会社だけでは解決できない「生活面」「家庭の問題」の悩みが原因であることがあります。そうした時、前述した「三位一体」の三者がそれぞれの役割を果たし、ベクトルを合わせて解決していくことが大事だと考えます。

「スワンベーカーリー」その後

かざぐるま 2006 年 4 月 誌面にて、スワンベーカーリー県立大学駅店開店時の様子を紹介させていただきました。その後おかげさまで地域の皆様に支えられながら来年 3 月に開店 3 周年を迎えます。クローバースタッフ 8 名も頑張っており、販売担当の責任者（フロアマネージャー）がクローバースタッフの担当を兼務しています。

今年の年頭、フロアマネージャーは全員に自分自身の目標をたてさせました。彼女曰く、今年のテーマは「自分で考える」。ひとりひとり得意なこと苦手なことも違うし性格も違う。そんな中、ひとりひとりにあった目標を考えさせ適宜面談を行いました。

三年目、スワンベーカーリーのクローバースタッフの面々は、それまでとは違い一回り成長したように思います。指示を仰ぐばかりだったクローバースタッフが「自分で考えなさい」と一喝されて、でもその後に答えを自分で出してくるのです。イキイキと

した働きぶりはフロアマネージャーも目を細めていました。

精神障がい者雇用の取組み

スワンベーカーリーでは精神障がい（統合失調症）の方も 2 名働いています。週 20 時間勤務で販売の業務についています。決して順風満帆とはいえませんが、就労支援機関の定着支援協力も得て、就労継続しています。

また今年よりスワンと新逗子事業所の 2 か所で（新逗子事業所ではパソコンを使ったデータ入力業務）精神障がいの実習生を受け入れる試みを初めて実施しました。様々な方を受け入れることでいま感じているのは「もっと働ける職域があるのでは？」ということです。とはいえ接客業かつ知的障がいの方が一緒に働くスワンの現場では困難な場面も多々あります。

認知機能障がいへの理解を深めることと、実習受入でノウハウをまだまだ積む必要があると感じています。

今後の展望

特例子会社である以上、親会社ならびにグループ企業から認められる「仕事」をし、かつ職域を拡大していかなければなりません。本年は新たに独身寮の清掃業務に新たな職域を広げました。38 名のクローバースタッフと共に歩みながら彼ら彼女らの定着（職場環境の改善・自立への指導）と新たな職域の可能性を常に探っていきたいと考えています。

最後に、クローバースタッフを支えることは大事なのですが、支える人材も大事です。「クローバースタッフと一緒に働く喜び・すばらしさ」が自然と広まり、人材が充実していくよう社内外にはたらきかけていきたいと考えています。